

# 教育相談対応に対する保護者の意識

## — 学校教育に対する保護者の意識調査の二次分析<sup>1,2</sup> —

中山 真

〈要旨〉本研究では、ベネッセ教育総合研究所（2012）による「学校教育に対する保護者の意識調査2012」のデータを用いて、教育相談対応に対する小・中学生の保護者の意識の特徴を明らかにすることを目的とする二次分析を行った。ほとんどの保護者が教育相談対応を重視していたが、学年による差異もあり、また、学校側の対応に満足している保護者とそうでない保護者が存在していた。そのため、教育相談対応についての希望と満足度をもとにクラスタを生成し、子どもの学年とクラスタ別の比較を行った。その結果、子どもの通学校への訪問回数、SC事業や学校に対する児童生徒・保護者による評価制度への態度が異なることが明らかになった。また、公立・私立学校の教育相談対応についての印象や中学受験において教育相談対応のよさを理由にしているか否かといった点もクラスタによって差異が見られた。

〈キーワード〉二次分析、学校教育、教育相談、保護者

---

1 研究者本人以外によって収集されたデータを二次データと呼び、それを用いた分析を二次分析と呼ぶ。諸外国では二次分析による研究が少なくなく、計量的な社会科学研究的発展に貢献している（佐藤・間瀬, 2002）。

2 本研究は、日本心理学会第83回大会（於・立命館大学大阪いばらきキャンパス）で発表した内容に加筆修正したものである。

## 問 題

本研究では、学校教育に対する保護者の意識調査の二次分析により、教育相談対応についての保護者の意識の特徴を明らかにする。

教育相談とは、中学校学習指導要領解説 特別活動編（文部科学省, 2008）によれば、「一人一人の生徒の教育上の問題について、本人又はその親などに、その望ましい在り方を助言することである。その方法としては、1対1の相談活動に限定することなく、すべての教師が生徒に接するあらゆる機会をとらえ、あらゆる教育活動の実践の中に生かし、教育相談的な配慮をすることが大切である」とされている。また、生徒指導提要（文部科学省, 2010）には、教育相談に関して「児童生徒それぞれの発達に即して、好ましい人間関係を育て、生活によく適応させ、自己理解を深めさせ、人格の成長への援助を図るものであり、決して特定の教員だけが行う性質のものではなく、相談室だけで行われるものでもありません」と述べられている。

このように教育相談は相談活動に限定されないということが強調されているが、このことは「教育相談の3段階の援助サービス」（石隈, 1999）という概念と関連する。これは、「一次的援助サービス」「二次的援助サービス」「三次的援助サービス」の3段階で構成される。「一次的援助サービス」は、すべての児童生徒を対象とする。これは、多くの児童生徒が会う課題（例：入学時の適応）の困難を予測して前もって行う予防的援助と、児童生徒が課題に取り組む上で必要なスキルを開発する援助がある。「二次的援助サービス」は、登校を渋る、学習意欲をなくしてきたなど配慮を必要とする児童生徒を対象とする。初期の段階で発見し、その問題の深刻化を予防する。「三次的援助サービス」は、特に重大な援助ニーズをもつ特定の児童生徒を対象とする。この場合、スクールカウンセラーや教師が、援助チームをつくり、児童生徒の状況についてのより精密な心理教育的アセスメントの実施とそれに基づく個別プログラムの作成を行う。以上から、教育相談は事後的な対応のみならず、「一次的援助サービス」や「二次的援助サービス」を見ると、問題の発生や深刻化の予防に主眼が置かれていることがわかる。

予防のためには、個別対応のみならず、保護者支援、教師支援、学校支援、

地域支援等を含む包括的支援を視野に入れた取り組みが必要である（木下, 2010）。特に子どもとの関係と同じくらい、あるいはそれ以上に重要なのが保護者との関係づくりである（内田・内田, 2011）。それは、保護者が子どもの発達や成長に大きな役割を果たしており（黒沢, 2002）、児童期から青年期の子どもは、学校生活の場での言動と家庭での言動が異なり、学校の問題だけを取り上げた対応は、子どもの置かれている全体的状況やその背景を理解できているとはいえない（上野, 2015）。そのため、教師による子どもの指導援助に保護者の力や、保護者と一緒に取り組むことは必要なことであり、特に子どもの年齢が低いほど、保護者の存在は大きく、連携に意味を持つ（黒沢, 2002）。また、大多数の保護者は、自分が子どもに対して十分な責任があるという思いがある（上野, 2015）。特に、問題のある子どもを抱える保護者は、問題の原因は自分にあると感じて心の中で自分を責めるといった辛い思いを抱えている（黒沢, 2002）。一方で、小中学生の保護者の2割が学校に苦情や要望を申し立てた経験がある（佐藤, 2011）など、保護者との良好な関係性の形成・維持は容易ではなく、近年は特に難しくなっているという指摘もある（内田・内田, 2011）。学校に対する親と子どもの期待と学校関係者の努力との間にズレ違いを引き起こす（黒崎, 1994）こともあり、学校に対する保護者のニーズを把握することは重要である。そこで、本研究では、学校における教育相談対応に対する保護者の意識に焦点を当て、その特徴を子どもの学年別に検討し、教育相談対応以外の意識や行動との関連を明らかにすることを目的とする。

## 方 法

本研究では、ベネッセ教育総合研究所（2012）による「学校教育に対する保護者の意識調査2012」<sup>3</sup>のデータを用いた分析を行う。このデータは、全国の公立小学校2・5年生、公立中学校2年生の保護者を対象として、学校に対する意識について幅広く質問を行った調査である。調査協力校は公立小学校28校、公立中学校25校である。それぞれの回答者数は子どもの学年順に2,280

3 単純集計はBenesse教育開発センター（2013）にまとめられている。なお同様の調査として、2018年調査（ベネッセ教育総合研究所, 2018）が行われているが、ローデータが二次分析のために公開されているのは、本研究で分析した2012年調査が最新のものである。

### 教育相談対応に対する保護者の意識（中山）

名、2,239名、2,258名と学年不明50名の計6,831名である。調査は2012年11月から2013年1月にかけて、自記式質問紙が学校から子ども経由で家庭に配布および回収された。配布数は8,766名、回収率は77.9%である。

主な調査内容は、学校に期待する事柄、通学校に期待する事柄、学校支援に関する行動の有無、学校の取り組みに関する満足度、学校外教育の利用度、子どもの将来について期待する事柄、近年の教育改革の争点における賛否、教育政策に関する税負担に関する意識、公立学校と私立学校の比較に関する意識である。そのうち、教育相談対応と直接関係すると思われる質問項目はTable 1に示す通りである。本研究では、これらの質問項目に対する回答傾向や、その他の回答との関連について分析を行った。

## 結 果

### 教育相談対応についての保護者の意識の全体的傾向

Table 1に示した、教育相談対応と直接関係すると思われる質問項目についての回答の全体的傾向については以下の通りであった。

通学校に「子どもの学校での様子を保護者に伝える（以下、子どもの様子を伝えてほしい）」「保護者が気軽に質問したり相談したりできるようにする（以下、気軽に相談したい）」を「とても望む」「まあ望む」と回答した保護者は、小学生・中学生の保護者とも、全体の9割以上に及んでいた。一方、「いじめや子どもどうしのトラブルへの対応」への満足度は半数以上が満足していると回答したのに対し、1/4の保護者は満足していないと回答した。教育改革の取り組みのうち、スクールカウンセラーの配置に関しては、小学生・中学生の保護者とも、8割を超える保護者が賛意を示した。いじめなどトラブルへの対応について、公立学校と私立学校のどちらが力を入れているかという質問に対しては、小学生・中学生の保護者とも「同じくらい」という回答が4割以上を占め、最も多かった。次いで「わからない」という回答も3割程度見られた。中学受験を検討している小学生の保護者が、中学受験をする理由として「いじめや非行が少ないと思うから」にあてはまると考える保護者は6割近くに及んだ。

### 教育相談対応に関する項目によるクラスタ分析

前述したように、教育相談対応に係る質問項目のうち、通学校に対する要望「子どもの様子を伝えてほしい」「気軽に相談したい」は回答に偏りが見られたため、学校の取り組みに対する満足度「いじめや子どもどうしのトラブルへの対応（以下、トラブル対応満足度）」の回答と組み合わせて、学年別にクラスタ分析を行い、これを以降の分析に活用することにした。

Table 1 教育相談対応に関連する質問項目に対する回答の集計

あなたはお子様が通われている学校に、次のようなことを望みますか		とても望む	まあ望む	あまり望まない	まったく望まない	
子どもの学校での様子を保護者に伝える	小学生	59.0	38.4	2.4	0.1	
	中学生	49.7	45.8	4.0	0.2	
保護者が気軽に質問したり相談したりできるようにする	小学生	45.0	48.8	5.5	0.4	
	中学生	37.7	52.9	8.2	0.5	
あなたは学校の取り組みに対して満足していますか	小学生	とても満足	まあ満足	あまり満足していない	まったく満足していない	
	中学生	7.1	53.0	27.0	7.8	
いじめや子どもどうしのトラブルへの対応	小学生	9.8	51.8	25.1	6.8	
	中学生	7.1	53.0	27.0	7.8	
あなたは、現在の教育改革で取り入れられている次のような取り組みについて、賛成ですか反対ですか	小学生	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	わからぬ
	中学生	38.8	44.8	3.2	1.0	8.8
あなたは、次のことについて、公立学校と私立学校のどちらのほうが力を入れていると思いますか	小学生	42.3	43.0	2.5	0.5	10.8
	中学生	38.8	44.8	3.2	1.0	8.8
いじめなどトラブルへの対応	小学生	9.4	40.8	16.2	30.5	
	中学生	10.1	44.9	15.7	26.3	
（中学受験を検討している小学生の保護者対象）あなたが、お子様に中学受験をさせるのはなぜですか	小学生	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	
	小学生	15.0	44.6	29.3	7.9	

注) 単位は%

まず、小2の保護者について $k$ 平均法によるクラスタ分析を行った。クラスタ数の設定を2～5で反復し、解釈可能性とサンプル数の散らばり具合から、クラスタ数は3を採用した（以下、3つのクラスタをⅠ・Ⅱ・Ⅲと表記する）。クラスタの特徴を調べるため3つのクラスタを独立変数、上記の通学校に対する要望2項目、学校の取り組みに対する満足度1項目を従属変数として、分散分析を行った。その結果、3項目とも有意な主効果が見られた（子どもの様子を伝えてほしい： $F(2, 2269) = 1589.05, p < .001, \eta^2_p = .58$ 、気軽に相談したい： $F(2, 2269) = 854.23, p < .001, \eta^2_p = .43$ 、トラブル対応満足度： $F(2, 2269) = 1614.39, p < .001, \eta^2_p = .59$ ）。多重比較の結果、「子どもの様子を伝えて欲しい」はⅠ<Ⅲ<Ⅱ、「気軽に相談したい」はⅠ<Ⅲ≒Ⅱ、「トラブル対応満足度」はⅢ<Ⅰ<Ⅱという差が確認された。これらの結果から、クラスタⅠを中間群（ $n = 665$ ）、Ⅱを要望高・満足群（ $n = 915$ ）、Ⅲを要望高・不満群（ $n = 520$ ）とした。

小5および中2の保護者についても同様の分析を行った。クラスタ数はいくつかの可能性が考えられたが、全ての学年を3で統一した。分散分析の結果、小5（子どもの様子を伝えてほしい： $F(2, 2325) = 140.92, p < .001, \eta^2_p = .11$ 、気軽に相談したい： $F(2, 2325) = 621.68, p < .001, \eta^2_p = .35$ 、トラブル対応満足度： $F(2, 2325) = 2663.67, p < .001, \eta^2_p = .70$ ）、中2（子どもの様子を伝えてほしい： $F(2, 2816) = 661.22, p < .001, \eta^2_p = .32$ 、気軽に相談したい： $F(2, 2816) = 1578.87, p < .001, \eta^2_p = .53$ 、トラブル対応満足度： $F(2, 2816) = 1425.36, p < .001, \eta^2_p = .50$ ）とも有意な主効果が見られた。多重比較の結果、小5は「子どもの様子を伝えて欲しい」はⅡ<Ⅰ≒Ⅲ、「気軽に相談したい」はⅡ<Ⅰ<Ⅲ、「トラブル対応満足度」はⅢ<Ⅱ<Ⅰという差が確認された。これらの結果から、クラスタⅠを要望高・満足群（ $n = 1301$ ）、Ⅱを中間群（ $n = 148$ ）、Ⅲを要望高・不満群（ $n = 679$ ）と、小2と同様の命名を行った。中2は「子どもの様子を伝えて欲しい」はⅢ<Ⅰ<Ⅱ、「気軽に相談したい」はⅢ<Ⅰ<Ⅱ、「トラブル対応満足度」はⅢ<Ⅱ<Ⅰという差が確認された。これらの結果から、小2・小5の命名と一部異なり、クラスタⅠを要望中・満足群（ $n = 914$ ）、Ⅱを要望高・不満群（ $n = 823$ ）、Ⅲを要望中・不満群（ $n =$

395) とした。

### 子どもの通学校への訪問回数

子どもの通学校への訪問回数について、学年・クラス別にクロス集計表を作成し、 $\chi^2$  検定および残差分析を行った（Table 2）。訪問回数は、「子どもの通学校に1年間に行った回数」に対して、「2回以下」「3～5回」「6～9回」「10回以上」の選択肢で回答されたデータを使用した。

$\chi^2$  検定の結果、小2は $\chi^2(6) = 12.25, p = .06, V = .05$ 、小5は $\chi^2(6) = 41.51, p < .001, V = .10$ 、中2は $\chi^2(6) = 17.27, p < .01, V = .07$ となった。有意傾向に留まった小2を除き、残差分析を行った。小5について、中間群は、「2回以下」が有意に多く、「10回以上」が有意に少なかった。一方で、要望高・満足群は、「2回以下」「3～5回」が有意に少なく、「10回以上」が有意に多かった。要望高・不満群は、「3～5回」が有意に多かった。中2について、要望中・満足群は、「3～5回」が有意に多かった。要望中・不満群は、「2回以下」が有意に多く、要望高・不満群は反対に「2回以下」が有意に少なかった。

Table 2 子どもの通学校への1年間の訪問回数

			2回以下	3～5回	6～9回	10回以上
小2	中間群	度数	19	236	243	157
	要望高・満足群	度数	15	302	333	264
	要望高・不満群	度数	18	192	169	142
小5	中間群	度数	14	72	46	16
		残差	4.35**	1.76†	-0.27	-3.62**
	要望高・満足群	度数	32	506	437	324
		残差	-2.71**	-3.29**	1.92†	2.88**
	要望高・不満群	度数	24	308	198	145
		残差	0.45	2.47*	-1.86†	-1.03

教育相談対応に対する保護者の意識（中山）

中2 群	要望中・満足	度数	146	542	137	87
		残差	-0.83	2.01*	-1.10	-0.94
群	要望中・不満	度数	90	210	59	35
		残差	3.57**	-1.61	-0.63	-0.99
群	要望高・不満	度数	121	459	145	96
		残差	-2.00*	-0.76	1.62	1.74†

注) † $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

### スクールカウンセラー配置に対する賛否

スクールカウンセラー（以下、SC）配置ニーズについて、学年・クラス別にクロス集計表を作成し、 $\chi^2$  検定および残差分析を行った（Table 3）。SC 配置ニーズは、教育改革の取り組みに関する11項目のうち、「スクールカウンセラーの配置」に関して、「賛成」「どちらかといえば賛成」「どちらかといえば反対」「反対」「わからない」の選択肢で回答されたデータを使用した。

$\chi^2$  検定の結果、小2は $\chi^2(8) = 150.81, p < .001, V = .19$ 、小5は $\chi^2(8) = 81.65, p < .001, V = .14$ 、中2は $\chi^2(8) = 109.55, p < .001, V = .16$ と全ての学年で有意であったため、残差分析を行った。小2について、中間群は、「賛成」が有意に少なく、「どちらかといえば賛成」「わからない」が有意に多かった。一方で、要望高・満足群および要望高・不満群は、「賛成」が有意に多く、「どちらかといえば賛成」「わからない」が有意に少ないことが共通していたが、要望高・満足群は「どちらかといえば反対」が有意に少なかったのに対し、要望高・不満群はこれが有意に多かった。小5について、中間群は、「賛成」が有意に少なく、「どちらかといえば反対」「反対」「わからない」が有意に多かった。それ以外のクラスは大きな特徴は見られなかったが、要望高・満足群で「わからない」が有意に少なかったことは、小2と同様であった。中2について、要望中・満足群は、「賛成」が有意に少なく、「どちらかといえば賛成」が有意に多かった。要望中・不満群は、「賛成」が有意に少なく、「どちらかといえば反対」「わからない」が有意に多かった。要望高・不満群は「賛成」

教育相談対応に対する保護者の意識（中山）

が有意に多く、それ以外の選択肢は有意に少なかった。

Table 3 スクールカウンセラー配置に対する賛否

		賛成	どちらかと いえば賛成	どちらかと いえば反対	反対	わからない	
小2	中間群	度数	182	328	16	4	121
		残差	-10.28**	5.39**	0.00	0.85	7.73**
	要望高・満足群	度数	484	350	11	1	60
		残差	7.16**	-2.54*	-3.22**	-1.97*	-5.40**
	要望高・不満群	度数	258	188	24	4	43
		残差	2.83**	-2.87**	3.70**	1.36	-2.10*
小5	中間群	度数	31	70	10	6	29
		残差	-5.35**	0.85	3.08**	5.90**	4.29**
	要望高・満足群	度数	559	591	29	4	108
		残差	1.12	1.40	-1.93†	-1.99*	-2.64**
	要望高・不満群	度数	303	279	20	2	68
		残差	1.75†	-1.93†	0.34	-1.13	0.42
中2	要望中・満足群	度数	307	451	36	11	80
		残差	-4.45**	3.34**	1.35	1.10	0.57
	要望中・不満群	度数	105	192	22	5	57
		残差	-5.58**	1.59	2.76**	0.75	4.87**
	要望高・不満群	度数	417	320	13	4	41
		残差	8.97**	-4.67**	-3.57**	-1.72†	-4.46**

注) † $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

学校・先生を評価する制度への賛否

子ども・保護者が学校・先生を評価する制度変更への賛否について、学年・クラス別にクロス集計表を作成し、 $\chi^2$ 検定および残差分析を行った（Table 4）。ここでは、教育に関する制度変更に関する13項目のうち、「子ども・保護者が学校や先生を評価する」に関して、「賛成」「どちらかといえば賛成」「ど

教育相談対応に対する保護者の意識（中山）

ちらかといえは反対」「反対」「わからない」の選択肢で回答されたデータを使用した。

$\chi^2$  検定の結果, 小2は  $\chi^2(8) = 125.14, p < .001, V = .17$ , 小5は  $\chi^2(8) = 41.84, p < .001, V = .10$ , 中2は  $\chi^2(8) = 79.31, p < .001, V = .14$ と全ての学年で有意であったため, 残差分析を行った。小2について, 中間群は「賛成」「どちらかといえは賛成」が有意に少なく, 「反対」が有意に多かった。要望高・満足群は「賛成」は有意に少なく, 「どちらかといえは賛成」は有意に多かった。一方, 要望高・不満群「賛成」が有意に多く, 「どちらかといえは反対」「反対」「わからない」は有意に少なかった。小5について, 中間群は「反対」が有意に多かった。要望高・満足群は「賛成」は有意に少なく, 「どちらかといえは反対」「反対」は有意に多かった。一方, 要望高・不満群「賛成」が有意に多く, 「どちらかといえは反対」「反対」は有意に少なかった。中2について, 要望中・満足群は「賛成」が有意に少なく, 「どちらかといえは反対」「反対」は有意に多かった。一方で, 要望中・不満群は「賛成」が有意に多く, 要望高・不満群も「賛成」が有意に多く, 「どちらかといえは反対」「反対」は有意に少なかった。

Table 4 子ども・保護者が学校や先生を評価する制度への賛否

		賛成	どちらかといえは賛成	どちらかといえは反対	反対	わからない	
小2	中間群	度数	41	134	216	143	116
		残差	-4.78**	-3.64**	1.78†	4.41**	1.74†
	要望高・満足群	度数	73	261	287	138	147
		残差	-4.00**	2.77**	0.97	-1.54	0.48
	要望高・不満群	度数	118	139	130	64	64
		残差	9.72**	0.72	-3.03**	-2.97**	-2.41*
小5	中間群	度数	14	35	41	33	23
		残差	-0.82	-0.50	-0.31	2.36*	-0.62
	要望高・満足群	度数	119	322	399	221	224
		残差	-4.36**	-0.88	2.34*	2.30*	-0.32

教育相談対応に対する保護者の意識（中山）

要望高・不満 群	度数	113	184	174	77	124
	残差	5.00**	1.19	-2.28*	-3.69**	0.67
中2 要望中・満足 群	度数	61	240	268	158	151
	残差	-8.07**	-0.92	3.12**	3.99**	1.20
要望中・不満 群	度数	73	110	96	49	56
	残差	3.05**	0.12	-0.97	-1.03	-0.88
要望高・不満 群	度数	156	233	190	89	123
	残差	5.76**	0.84	-2.40*	-3.23**	-0.51

注) † $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

いじめなどトラブルへの対応についての公立と私立の比較

公立学校と私立学校を比較し、どちらがより力を入れていると思うかを回答した19項目のうち、「いじめなどトラブルへの対応」について分析を行った。選択肢は「どちらかといえば公立」「同じくらい」「どちらかといえば私立」「わからない」である。学年・クラス別にクロス集計表を作成し、 $\chi^2$ 検定および残差分析を行った（Table 5）。

Table 5 「いじめなどトラブルへの対応」のよさに関する公立・私立学校の比較

		どちらかといえば		同じくらい	どちらかといえば		わからない
		公立	私立		公立	私立	
小2 中間群	度数	67	276	112	186		
	残差	0.10	0.22	0.46	-0.68		
要望高・満足 群	度数	108	405	128	238		
	残差	2.50*	2.69**	-2.47*	-2.54*		
要望高・不満 群	度数	35	185	103	185		
	残差	-2.96**	-3.31**	2.34*	3.63**		
小5 中間群	度数	12	57	19	56		
	残差	-0.48	-0.79	-1.40	2.31*		
要望高・満足 群	度数	144	568	192	370		

教育相談対応に対する保護者の意識（中山）

	残差	3.62**	2.18*	-3.64**	-1.65
要望高・不満群	度数	40	260	151	203
	残差	-3.53**	-1.85†	4.57**	0.46
中2 要望中・満足群	度数	110	449	117	221
	残差	2.39*	2.43*	-3.68**	-1.32
要望中・不満群	度数	73	378	147	202
	残差	-1.54	0.18	1.84†	-0.69
要望高・不満群	度数	34	151	79	120
	残差	-1.12	-3.34**	2.39*	2.55*

注) † $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

$\chi^2$  検定の結果、小2は  $\chi^2(6) = 32.19, p < .001, V = .09$ 、小5は  $\chi^2(6) = 37.01, p < .001, V = .10$ 、中2は  $\chi^2(6) = 28.65, p < .001, V = .08$  と全ての学年で有意であったため、残差分析を行った。小2について、中間群に有意差は見られなかった。要望高・満足群は「どちらかといえば公立」「同じくらい」は有意に多く、「どちらかといえば私立」「わからない」は有意に少なかった。一方、要望高・不満群「どちらかといえば公立」「同じくらい」が有意に少なく、「どちらかといえば私立」「わからない」は有意に多かった。小5について、中間群は「わからない」のみ有意に多かった。要望高・満足群は「どちらかといえば公立」「同じくらい」は有意に多く、「どちらかといえば私立」は有意に少なかった。一方、要望高・不満群「どちらかといえば公立」が有意に少なく、「どちらかといえば私立」は有意に多かった。中2について、要望中・満足群は「どちらかといえば公立」「同じくらい」が有意に多く、「どちらかといえば私立」は有意に少なかった。要望中・不満群に顕著な有意差は見られなかった。一方、要望高・不満群は「同じくらい」が有意に少なく、「どちらかといえば私立」「わからない」は有意に多かった。

### 中学受験理由

中学受験の予定について「はい」「まだ決めていない」「いいえ」のうち、「いいえ」以外を選択した小学生の保護者（小2： $n = 584$ ，小5： $n = 439$ ）を対象とした，子どもに中学受験をさせる理由14項目の回答データがある。そのうち、「いじめや非行が少ないと思うから」について，分析を行った。選択肢は「とてもあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」である。学年・クラス別クロス集計表を作成し， $\chi^2$ 検定および残差分析を行った（Table 6）。

$\chi^2$  検定の結果，小2は $\chi^2(6) = 8.42, p = .21, V = .09$ ，小5は $\chi^2(6) = 14.89, p < .05, V = .14$ となり，小5のみ残差分析を行った。中間群は「まああてはまる」が有意に少なく，「まったくあてはまらない」が有意に多かった。一方，要望高・満足群は「まああてはまる」が有意に多く，「まったくあてはまらない」は有意に少なかった。要望高・不満群は顕著な差は見られなかつ

Table 6 中学受験理由「いじめや非行が少ないと思うから」の回答分布

			とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
小2	中間群	度数	9	57	39	15
	要望高・満足群	度数	35	95	85	20
		残差				
小5	中間群	度数	7	7	12	7
	要望高・満足群	度数	34	110	83	15
		残差	0.79	2.00*	0.33	-2.90**
要望高・不満群	度数	19	47	38	16	
	残差	0.24	-0.63	-0.56	1.65†	

注) † $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

た。

## 考 察

### 保護者の意識の全体的傾向とクラスタ分析

通学校に対し、「子どもの様子を伝えてほしい」、「気軽に相談したい」という希望は、ほとんどの保護者が持っており、昨今の学校におけるいじめ・不登校問題、発達障害に起因する学校不適應の問題に対する関心の高まりも相まって、教育相談対応に対する意識の高さが伺える。しかし、保護者の中には学校の対応に不満を持つ者も一定程度見られることから、本研究では、通学校に対する「子どもの様子を伝えてほしい」、「気軽に相談したい」希望と、「トラブル対応満足度」によるクラスタ分析を行い、以下の分析に活用することにした。小2と小5については、中間群、要望高・満足群、要望高・不満群の3つのクラスタが生成された。一方で、中2については、要望高・不満群は同様に生成されたが、要望中・満足群、要望中・不満群という異なるクラスタが生成された。このことから、子どもの年齢が低いほど、保護者は学校生活についての情報を求め、密なつながりを求めること、一方で、子どもが中学生になると精神的に自立し始めるため、小学校のときほどは学校からの情報伝達やつながりを求めない傾向が示唆される。

### 保護者の行動および教育制度に対する意識

子どもの年齢が低いほど、学校とのつながりを求める傾向にあると上述したように、保護者が子どもの通学校に訪問した回数も、それと対応していた。小2の保護者においては、教育相談対応の要望や満足度に関わらず、多くの保護者が2か月に1回以上のペースで学校を訪問していた。小5になると、全体的に訪問回数は減少し、2か月に1回以下のペースとなっていた。小2と異なり、小5においてはクラスタによる違いが見られた。とりわけ強い教育相談対応の要望を持たない中間群は、他と比較し、訪問回数は少ない傾向にあった。一方で、要望高・満足群は、他と比較し、訪問回数が多い傾向にあり、要望高・不満群は訪問回数が少ない傾向にあった。教育相談対応への要望が強く、それに伴って学校に訪問できる機会があれば、積極的に訪問したい意向もある

### 教育相談対応に対する保護者の意識（中山）

のだろう。訪問によって、学校やクラス、教師の様子を直接把握することもでき、満足感につながり、訪問が思うようにできないと、不満につながる可能性も考えられよう。しかし、中2については、小5ほどクラスタによる違いは明確に現れなかった。強いて挙げるとすれば、満足度よりも教育相談対応への要望の高さと連動し、要望が高い方が訪問回数は多い傾向にあった。学校の対応に満足しているようがいまいが、保護者が積極的に学校に出て行くよりも、子どもと学校の間で対応していくことと捉えている保護者も多いのかもしれない。

次に、教育制度に対する意識について考察したい。SCについては、全体として多くの保護者が賛意を示した。1995年度の「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」に端を発し、本調査が行われた2012年段階でも多くの保護者にその存在と意義が浸透しているといえよう。しかし、教育相談対応の要望がとりわけ強くないクラスタの保護者では、「わからない」という回答も多く見られた。SCは週に1回程度の非常勤であることがほとんどで、他の教職員に比べて身近な存在とはいえないかもしれない。入学式やPTA総会、保護者講演会など顔の見える場で周知活動を継続していく必要がある。

そして、子ども・保護者が学校や先生を評価する制度への賛否については、全体として、学校の対応に満足している保護者ほど反対、不満な保護者ほど賛成の意向を示していた。この制度は、子どもや保護者の立場に立つ仕組みであるが、教育相談も子どもや保護者の立場に立つものである。冒頭で述べたように、個別面談の場だけでなく、学校における教育活動の様々な場面で、学校や教職員が子どもや保護者の立場に寄り添うものであることを示すことが重要であると考えられる。特に、不満群の保護者は学校への訪問回数も比較的少ない傾向があるため、学校だよりや学級通信を活用するなど工夫が必要である。

### 公立・私立学校に対する意識と中学受験

教育相談における対応力は、公立学校・私立学校どちらが優れていると感じるかについて、全体として満足群は「どちらかといえば公立」、不満群は「どちらかといえば私立」と回答している傾向が見られた。本調査の回答者は全て公立学校に通う子どもの保護者であり、現状に不満を抱えていることが、私立

## 教育相談対応に対する保護者の意識（中山）

学校の対応の良さの印象形成につながっている可能性も考えられよう。

続いて、中学受験を視野に入れている小学生の保護者がその理由として「いじめや非行が少ないと思うから」を挙げた割合について、小2ではクラスタによる差異は見られなかった。一方で、小5では中間群でその理由はあてはまらないという回答が多く、要望高・満足群ではあてはまるという回答が多い傾向が見られた。要望高・不満群では顕著な差異は見られなかった。この結果について、小2段階ではまだ小学校に入学して間もない段階であり、中学受験に向けた明確な理由づけはなされていないと推察される。一方で、小5の秋から冬の段階では中学受験についての意志決定が進んでいると考えられる。ただし、現在の通学校の対応に不満があって、学区の中学校以外の学校を志望するということではなさそうである。要望高・満足群は、いじめや非行の問題に巻き込まれない環境を追求し、中間群は学力向上やその後の進路など、教育相談対応以外の理由があると推測される。

このように、中学受験を検討していない保護者も含めたデータでは、私立学校の教育相談対応に対して、良いイメージが持たれているものの、実際に中学受験を検討している保護者は、私立学校の方が教育相談対応が良いと考えているとは限らなかった。一般に小学校段階でいじめに遭ったり、不登校状態となったりした子どもが、居住学区の公立学校以外の中学校に進学するケースも見られるが、その子にあった進路選択ができるよう、小学校では保護者との進路相談の場において、地域の公立・私立中学校についての情報提供が必要となると考えられる。

## まとめ

本研究では、小学生および中学生の保護者の学校教育に対する意識調査のデータを用いて、教育相談対応に対する意識に絞って二次分析を行った。

全体として、ほとんどの保護者が教育相談対応を重視していたが、学年による差異もあり、また、学校側の対応に満足している保護者とそうでない保護者が存在していた。教育相談対応についての希望と満足度をもとにクラスタを生成し、このクラスタによって、子どもの通学校への訪問回数、SC事業や学校

## 教育相談対応に対する保護者の意識（中山）

に対する児童生徒・保護者による評価制度への態度が異なることが示された。また、公立・私立学校の教育相談対応についての印象や中学受験において教育相談対応のよさを理由にしているか否かといった点もクラスタによって異なっていた。

それぞれの学校において、保護者の意向を定量的に把握する機会は少なく、本研究で大規模調査をもとに、保護者の教育相談対応に対する意識の傾向を明らかにしたことは意義のあるものと考えられる。しかし、通常の心理学研究で行われる調査法と異なり、それぞれの質問項目は内容ごとに単項目であり、何をもってそのように回答したかという理由づけは明確には行えず、信頼性や妥当性には課題があるだろう。また、本研究で分析対象とした項目は調査項目の一部であり、分析対象としなかった項目（例：デモグラフィック変数、学力についての意識）を使用することで、新たな知見が見出せる可能性も考えられる。しかし、本研究で分析に使用したデータは、2012年に収集されたもので、既に5年以上経過している。今後より新しいデータが公開されることがあれば、それをういて詳細に検討することが望ましいだろう。

## 引用文献

- Benesse 教育研究開発センター（2013）. 学校教育に対する保護者の意識調査2012ダイジェスト Retrieved from <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=3267>（2019年4月22日）
- ベネッセ教育総合研究所（2012）. 学校教育に対する保護者の意識調査2012
- ベネッセ教育総合研究所（2018）. 学校教育に対する保護者の意識調査2018ダイジェスト Retrieved from <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=5270>（2019年4月22日）
- 石隈利紀（1999）. 学校心理学——教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- 木之下隆夫（2010）. 不登校の予防対策 田嶋誠一（編）不登校：ネットワークを生かした多面的援助の実際（pp.94-99） 金剛出版

## 教育相談対応に対する保護者の意識（中山）

- 黒崎勲（1994）. 学校選択と学校参加 —— アメリカ教育改革の実験に学ぶ —— 東京大学出版会
- 黒沢幸子（2002）. 指導援助に役立つスクールカウンセリング・ワークブック 金子書房
- 文部科学省（2008）. 中学校学習指導要領 特別活動編
- 文部科学省（2010）. 生徒指導提要
- 佐藤晴雄（2011）. 学校における保護者対応について 文部科学省 平成22年度学校マネジメント支援推進協議会講演資料 Retrieved from [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/uneishien/detail/1301970.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/uneishien/detail/1301970.htm)（2019年4月22日）
- 佐藤博樹・間淵領吾（2002）. 特集 二次分析の新たな展開を求めて 理論と方法, 17, 1-2.
- 内田利広・内田純子（2011）. スクールカウンセラーの第一歩：学校現場への入り方から面接実施までの手引き 創元社
- 上野和久（2015）. 第12章 保護者への対応 小野田正利・藤川信夫（監修）・大前玲子（編）体験型ワークで学ぶ教育相談（pp. 209-228） 大阪大学出版会

## 付 記

二次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「学校教育に対する保護者の意識調査, 2012」（ベネッセ教育総合研究所）の個票データの提供を受けました。

Parents' Attitudes toward School Counseling: Secondary Analysis for  
Survey of Parents/guardians' Attitudes toward School Education

Makoto NAKAYAMA

Abstract

In this study, using the data of "Survey of Parents' Awareness of School Education 2012" by Benesse Institute of Education (2012), the secondary analysis for the purpose of clarifying the features of the attitudes of parents of elementary and junior high school students for the school counseling was carried out. Most parents placed importance on school counseling, but there were differences among grades, and there were parents who were satisfied with the school's response and those who were not. Therefore, the cluster was generated on the basis of request and satisfaction on the school counseling, and the comparison by grade of the child and cluster was carried out. As the result, it was clarified that the following differed by the cluster: Visiting frequency to the school, pros and cons to SC, attitude to the evaluation system by children and guardians for the school. And, there was also a difference by the cluster on impression on school counseling of public and private schools.

Keywords : secondary analysis, school education, school counseling, guardians